

## <報 告>

# モンゴル仏教における「朝課」

嘉 木 揚 凱 朝

## 1. はじめに

モンゴルの仏教寺院ではたいてい、毎朝 5 時 30 分から朝課が行われる。法会に先立って、寺院の若い僧侶が「悲願頌」、すなわちチベット仏教ゲルク派の開祖ツォンカパ大師を讃える宗喀巴大師讚 (dmigs brtse ma) をチベット語で、大きな美しい声で唱え始める。

dmigs med brtse baḥi gter chen spyān ras gzigs //

dri med mkhyen paḥi dbaḥ po ḥjam paḥi dbyaḥ //

bdud dpuḥ ma lus ḥjoms mdsad gsaḥ baḥi bdag //

gaḥ can mkhas paḥ gtsug rgyān tsoḥ kha pa //

blo bzaḥ grags paḥi shabs la gsol ba ḥdebs //(1)

(無縁悲藏觀自在，無垢智王微妙音，伏魔無餘秘密主，雪嶺智嚴宗喀巴，善慧名称前祈禱。)

一切平等，慈悲の大蔵である觀世音菩薩，

無垢なる智慧を具足した文殊菩薩，

一切の魔軍を降伏した秘密主 (金剛手ともいう)，

雪山チベットの智慧で莊嚴したツォンカパ，

ロサンタクパの足下に帰依いたします，と。

なぜモンゴルの仏教寺院で、法会に先立って「悲願頌」が唱えられるのか。私は、モンゴル仏教の大本山である北京雍和宮の高僧イエシナデムダ (Ye śes nad med 88 歳) 師に尋ねた。尊師によると、仏教徒は、仏教に仏縁をもったからであり、仏教に帰依したことはすべて、上師から導いて頂いた

からであり、こうして仏教徒になることができたと考えているからとのことであった。だからモンゴル仏教では、ツォンカパ大師の恩徳を記念して、法会が始まる前に、必ず「悲願頌」を唱えることにしているのである。

因みに『開勝道門誦』(*lam mchog sgo hbyed ces bya ba bshugs so*)には、次のように述べている。

Yon tan kun gyi gshir gyur drin can rje// tshul bshin bsten pa lam gyi rtsa baru//  
ligs par mthoñ nas hbad pa du ma yis// gus pa chen pos bsen par byin gyis  
rlobs//<sup>(2)</sup>

(恩師是諸功德本，如理奉行即道因；善見精進菩薩行，加持願令勤奉侍。)

恩師は諸々の功德の本であり、奉行する理法が仏道の根本になり、善見にして菩薩行に精進し、大切に信仰し依頼するように加持し奉る。

僧侶が毎朝、全員が揃って法会に参加する理由は、第一は、仏教の伝統的な修行法であることである。第二は、「朝暮不軌，猶良馬無繮」<sup>(3)</sup>のように朝は、一日の生活と仕事の始まりである。毎朝、僧侶は、仏典を念誦することによって、「依法為師」，仏教の戒律で自己を戒めるためである。そのために、釈尊の教えである「行住坐寢」によって生活と修行を戒めることにある。第三は、仏教で説いている「僧」は、団体を指している。四名の比丘以上は「僧」である。だから、四名、あるいは、何十人、何百人の僧侶によって執り行われる朝課の法会は、法力無辺となり、一切衆生を救済する無上の功德となる勤行になるのである。仏弟子である僧侶は、多年にわたって戒律を守り、三学である戒・定・慧による修行を積み重ねた功德がある。密教でいえば、灌頂・伝承した法脈があり、仏・菩薩、本尊により加持された真言がある。だから、僧侶による法会は殊勝な功德があるとす。

信者が仏教寺院を訪れ、自分と家族、更に一切衆生の「離苦得楽」のために、僧侶に祈祷と読経を厳修してもらうことは、実に無量な功德になると考えられている。

また『兜率天上師瑜伽法』(*dgah ldan lha brgya ma bshugs so*)には、次の

ように述べている。

Śes byaḥi khyon kun ḥjal baḥi blo gros thugs// skal bzañ rna baḥi rgyan gyur  
ligs bsad gsung// grags paḥi dpal gyis lham mer mdses paḥi sku// mthoñ thos  
tran pa don ldan la phyag ḥtshal//<sup>(4)</sup>

(偏量所知明慧意，賢士耳嚴善説語；名称赫耀瑞嚴身，見聞憶念益敬礼。)

密教の上師の「心」は，無量の智慧に溢れている。「語」は，賢士の耳で莊嚴された善語である。「身」は，光り輝く瑞嚴の身であり，見ること，聞くこと，思うことによる利益を賜わる上師に礼拝し奉る。

だから，密教に説く上師の「身，語，心」は，優れた功德を積んでいる高僧のそれであるから，信者は，仏縁があつて，優れた僧侶による法会を依頼することが，娑婆世界の人々にとって優れた福德になると考えられている。

## 2. モンゴル仏教寺院で「朝課」に用いる経文と願文

朝課に用いる経文には、『帰依発心儀軌』(skyabs ḥgro sems bskyed bshugs so) 『兜率天上師瑜伽法』(dgah ldan lha brgya ma bshugs so) 『聖救度仏母二十一種礼賛』(rje btsun ḥphagas ma sgrol ma la bstod pa bshugs so) 『白度母賛』(sGrol dkar bstod pa) 『般若波羅蜜多心経』(bCom ldan ḥdas ma śes rab kyi pharol tu phyin paḥi sñing po bshugs so) 『大白傘盖』(gdugs dkar bsdu ba) 『釈迦牟尼仏賛』(skabs gsum pha bshugs so) 『普賢菩薩行願品』(ḥpags pa bZaḥ po spyod paḥi smon lam gyi rgyal po bshugs so) (等五大願) 『阿弥陀仏呪文』(tShe dpag med la bstod pa) 『薬師仏呪文』(Saḥs rgyas sman blaḥi gzuḥs) 『観世音六字真言』(thugs rje chen poḥi gzuḥs) 『供養護法文』(mgon chos lha gsum gyi gtor ḥbul) 『関羽賛文』(gabn loye bsañ mchod), 『祈求運氣亨通神香供養』(rlung rtaḥi bsañ mchod ces bya ba bshugs so) 等がある<sup>(5)</sup>。

モンゴル仏教寺院で，寺院の僧侶全員が朝課に参加し勤行する目的は，「続仏慧命」と言い，釈尊の教えを継承し，「以法為師」の教えによる法会を営むことである。だから，僧侶は，「学仏行仏」の方針をもち，一切衆生を

煩惱から解脱させなければならないという、「慈悲喜捨」の大願大行の菩薩行を実行していると考えられる。

モンゴルの地で信仰されている仏教の最大の特徴は、僧侶の在り様にある。モンゴルでは、僧侶は仏・菩薩の再来とされる。仏・菩薩の再来である僧侶の中に上師があり、上師の中に活仏がある。上師や活仏を含めた僧侶に篤い信仰を寄せるのが、モンゴル仏教徒である。モンゴル仏教徒は四衆弟子から成る。四衆とはモンゴル語では、比丘のアヤガ・タヒリク (ayaga takimlig), 比丘尼のチバガンチャ (cibaganca), 男居士のウルディ・シトゥゲン (eregtei sitügen), 女居士のウームクディ・シトゥゲン (emegtei sitügen) という。こうして釈尊と、釈尊の教えと、仏・菩薩の再来としての僧侶という仏・法・僧が備わった。モンゴル仏教では、これに上師を加えて「上師・仏・法・僧」としたのが「四宝」である<sup>(6)</sup>。これは、チベット仏教以来の伝統である。

仏教がモンゴルの地に伝来した後、寺院は、民衆にとって聖地浄土であると信じられてきた。高僧たちを「仏・菩薩」の再来であると信じ、これらの高僧をモンゴル語でホトクト (Qugtu 呼図克図) と尊称してきたわけである<sup>(7)</sup>。ホトクトは、煩惱を断滅して浄果に達した聖者をいう。これらのホトクトに帰依し、祈念すれば、今生では無事に月日を送り、幸せに生活することができるとされる。死後は、生死流転の世界を離脱し、聖なる仏国・極楽浄土などに往生することができるとモンゴル人は確信している。とりわけ、一般のモンゴル人は、自分たちは日常生活の中で、知らない間に多くの罪悪を造っている。従って、その罪悪を浄化するために浄土である寺院を訪れ、僧侶に懺悔の儀式を願い、また、自分たちの家に僧侶を招いて読経してもらったりする。民衆が、僧侶に依頼して経典を読誦してもらう理由は、上述したようにモンゴル仏教では、僧侶が、釈尊に代わって釈尊が説いた教えを民衆に読誦することにある。民衆は、日常生活の中で、知りながら、あるいは、知らない間にいろいろな罪悪を造っているから、修行を達成している僧侶によって法要を行なってもらえば、必ずその罪悪を浄化することができる

と確信している。もし、僧侶にこのような役割りができなければ、民衆はわざわざ聖地浄土であるとされる仏教寺院を訪れ、僧侶に「ご祈祷の法会」と「懺悔の儀式」などを依頼する必要がないものと考えられる。僧侶は、民衆の願いを叶える責務があり、こうしないと釈尊の弟子にはなり得ない<sup>(8)</sup>。

上述の考えたことは、教義仏教 (Doctrinal Buddhism) ではなく、民衆仏教 (Popular Buddhism 庶民仏教) をもって、つまり信仰仏教の立場から考えた。一般の民衆は、折角得た人身を活かして永遠に家族や親類と一緒に生活を送りたいという民衆仏教<sup>(9)</sup>の思想が、モンゴル仏教徒の日常生活に生きている。一般の民衆にとっては、教義仏教より民衆仏教の方が馴染み易いものである。言い換えれば、民衆仏教は、つまり信仰仏教ということであるからである。一般の民衆にとって仏教の教義がどのようなであっても、関心をもっているとは限らない。民衆が、関心をもっているのは、信仰の面である。民衆は、仏教の教義などを深く理解しようとは考えていない。民衆は、仏教を信じるだけで満足している人が多い。

モンゴル仏教の重要な修行法の一つの特徴は、母なる一切衆生を聖なる幸福田であると考えるところにある。一切衆生を自分の今生の父母、兄弟、姉妹であるように愛し、助け合わなければならないと考えている。こうすることによって、成仏の条件の一つである「福德資糧」を得る修行の重要な機会になると信じている。

こういう意味から、モンゴルの地の母親にとっては、自分の子が僧になることは、「金の塔」(altan suburga) を造ることと同等であるとされる。僧になった子が、母なる一切衆生に利益することは、母親の最高の光栄であるとされている。

『釈迦牟尼仏賛』(skabs gsum pha bshugs so) には、

ston pa h̄jig rten khams su byon pa dañ// bstan pa ñi ḥod śin tu gsal ba dañ//  
bstan dsin bu slon śin tu mthun pa yi// bstan pa yun riñ gnas paḥi bkra śis  
śog//<sup>(10)</sup>

(一切諸仏興於世，聖教顯明如日光；持教相和如兄弟，願施正教恒吉

祥。)

一切の諸々の仏は世を興し、聖なる教えは日光の如く明らかであり、仏教に帰依している人は相和し、兄弟の如くであり、正しい教えは常に吉祥であることを願う。

と記述している。

諸仏・諸菩薩は、それぞれの「本願」と「誓願」を立てている。人々を救済し、人々を護り、人々の願いを円満させている。衆生はいろいろで、それぞれにそれぞれの願いがあるから、モンゴル仏教寺院で仏教の「対機説法」の方便により、つまり、病気の原因によって治療する方法をいろいろ変えて人々の願いに合わせて法会を執り行っている。

『帰依発心儀軌』(skyabs ḡgro sems bskyed bshugs so) には、

Saṅs rgyas chos daṅ dshogs gyi mchog rnams la// byaṅ chub bar du bdag ni sgyabs su mchi// bdag gis sbyin sogs bgyis pa ḡdi dag gis// ḡgro la phan phyir saṅs rgyas ḡgrub par Cog//<sup>(11)</sup>

(諸仏妙法衆中尊、乃至菩提我帰依；我行施等諸善根、為利有情願成仏。)

諸仏、妙法、僧侶たちに、私は悟り(菩提)まで帰依し、私が行った施[布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の六度]などをもって、生けるものすべての利益のために、成仏を願い奉る。

と記述している。

ここでは、三宝帰依と発菩提心をすすめている。これは、仏教徒の基本的な修行の心構えである。顕教だけでなく密教でも、仏教に帰依した仏教徒は、必ず念誦しなければならない。密教では、三帰依の上に上師にも帰依しなければならない。それは、密教では、「仏・法・僧」があっても、上師が、三宝の素晴らしい功德と法による解脱の道などを詳しく教えてくれないと、恐らく人々が、仏縁に繋がることがないと、モンゴル仏教では考えている。

『帰依発心儀軌』(skyabs ḡgro sems bskyed bshugs so) にはさらに、

Sems can thams cad bde ba daṅ bde baḡi rgyu daṅ ldan par gyur cig/ sems can

thams cad sdug bsñal dang sdug bsñal gyi rgyu dañ bral bar gyur cig/ sems  
can thams cad sdug bsñal med pañi bde ba dañ mi ḥbral bar gyur cig/ sems can  
thams cad ñe riñ chags sdañ gñis dañ bral bañi btañ sñoms la gnas par gyur  
cig/<sup>(12)</sup>

(願諸有情具足安樂及安樂因，願諸有情永離苦惱及苦惱因；願諸有情永  
不離失無苦之樂，願諸有情遠離愛惡親疏住平等捨。)

諸々の生けるものは、安樂及び安樂の因を具足することを願ひ（発慈  
心）、諸々の生けるものは、苦惱及び苦惱の因から永遠に離れることを  
願ひ（発悲心）、諸々の生けるものは、永遠に無苦の樂から離れ失なう  
ことがないことを願ひ（発喜心）、諸々の生けるものは、愛惡親疏を遠  
離し、平等に住することを願ひ奉る（発捨心）。

と四無量心を記述している。

『般若波羅蜜多心經』 (*bCom ldan ḥdas ma śes rab kyi pha rol tu phyin pañi  
sñing po bshugs so*) には、

De lta bas na bden par śes par byas te/ śes rab kyi pha rol tu phyin pañi snags/  
rig pa chen poñi snags/ bla na med med pañi snags/ mi mñam pa dañ mñam  
pañi snags/ sdug bsñal thams cad rab tu shi bar byed pañi snags/ mi brdsun pas  
na bden pa śes par bya ste//<sup>(13)</sup>

(故説般若波羅蜜多呪，是大神呪，是大明呪，是無上呪，是無等等呪，  
能除一切苦呪，真實不虛。)

であると述べる。また

bdag cag dpon slob yon mchod ḥkhor dañ bcas pa rnams kyi dam pañi chos  
zab mo grub pa la bar du bcad pañi bgegs dañ mi mthun pañi phyogs thams  
cad ḥphags pa dkon mchog gsum gyi bkaḥ bden pañi stobs kyis phyr zlog par  
gyur cig/ med par gyur cig/ shi bar gyur cig/ rab tu shi bar gyur cig/ dgra thams  
cad byams pañi sems dang ldan shiñ/ bgegs bar chad thams cad śanting ku ru  
ye sbaḥ lha// bgegs rigs stoñ phrag brgyad cu shi ba dañ/ mi mthun gnod pañi  
bgegs dañ bral ba dañ// mthun par gyur cig phun sum tshogs gyur pañi// bkra

sis des kyañ deñ ḥdir bde legs śog//<sup>(14)</sup>

(又云、我等師徒施主及眷属修習甚深妙法時、中断障碍以及諸逆縁承蒙三宝之妙語真実力普令回遮之、消除之、息滅之、悉皆息滅之；諸敌轉成具足慈悲心、障碍中断悉消除、一切成吉祥如意。八万障類皆息滅、遠離違碍之加害、成就圓滿諸順縁、以此吉祥現呈瑞。)

私たち、師も、生徒も、施主も、及び眷属は、甚深なる妙法を修行するに際して、中断と障碍及び諸々の逆縁を、三宝の聖なる妙語である真実力によって普ねくこれを断ち、これを消除し、これを息滅し、これをみなことごとく息滅する。諸々の悪人も、慈悲心を具足し回轉し、すべての障碍と中断を消除し、一切は吉祥如意を成ずる。八万の障害はすべて息滅し、違碍による加害を遠離し、諸々の順縁を成就し、これをもって吉祥は善樂になることを願い奉る。

と記している。

『聖救度仏母二十一種礼賛』(rje btsun ḥphagas ma sgrol ma la bstod pa bshugs so) には、

Lha mo la gus yañ dag ldan pas// blo lan gañ gis rab dañ brjod de// srod dañ tho rañ lañs par byas nas// tran pas mi ḥjigs thams cad rab ster// sdig pa thams cad rab tu shi bas// nan ḥgro thams cad ḥjoms pa ñid ḥthong// rgyal ba bye ba phrag bdun rnams kyis// bu ḥdod pas ni bu thob ḥgyur shi// nor ḥdod pas ni nor rnams ñid thob// ḥdod pa thams cad thob par ḥgyur la// ḥgegs rnams med cing so sor ḥjoms ḥgyur//<sup>(15)</sup>

(救度尊処誠信礼、是故贊嘆根本呪、毎晨早起夕時礼、憶念施諸勝無畏、一切罪業尽消除、悉能超越諸惡趣、此等速能得聡慧。欲乞男女得男女、求財宝位獲富饒、善能圓滿随意願、一切障碍不能侵。)

と記述している。

上の『礼賛』では、修行者である僧侶は毎朝毎晩この『礼賛』を念誦した功德によって、ターラー菩薩 (Tārā) に何を伝えることができ、ターラー菩薩は、本願によって、人々の願いに応じて、「有求必応」の救済の菩薩行で

来迎し、「随时随地」に願う人を助けてくれるとされている。モンゴル地域とチベット地域では、ターラー菩薩は、人々の日常生活のために、大きく役割を果たしていると深く信仰されている。日本仏教では、みな『般若心経』を暗記しているように、浄土真宗でいえば、門徒はみな『正信偈』を暗記して、念誦しているように、多くのチベットの仏教徒は、毎朝毎晩『聖救度仏母二十一種礼賛』を念誦している。一般のモンゴルの仏教徒は、チベット語が理解できないため、わざわざ仏教寺院を訪ねたり、あるいは僧侶を自分たちの家に招いて『聖救度仏母二十一種礼賛』を念誦してもらったりする。

### 3. おわりに

釈尊の教えは、「浩如煙海，博大精深」であるとされる。だから、一切衆生を煩惱から解脱に導く道も、八万四千の法門があるとされる。しかし、仏教の根本の教えは「縁起の理法」である。そして釈尊は、それぞれの衆生にその能力に応じて「対機説法」するとされ、すなわち応病与薬せられた。このように方便をもって、衆生を救済してきたことは周知の通りである。山川草木あらゆるものは、すべて因縁の関係にある。仏教は、「此有則彼有，此生則彼生；此無則彼無，此滅則彼滅。」<sup>(16)</sup>と縁起の真理を説いている。人に対しても、あるいは、衆生に対しても、仏教との出会いは、仏縁によるものである。仏教徒は、念仏にしても、坐禅にしても、真言を念じるにしても、どれでもが仏縁によるものとされる。つまり、ある人は禅宗に仏縁があり、ある人は浄土宗や浄土真宗や真言宗に仏縁があるということになる。モンゴル仏教ではチベット仏教と同じく、密教に仏縁がある人は、一生優れた福德に溢れ、幸せな人になると考えている。

モンゴル仏教寺院では、僧侶は朝課で次の「願文」を用いている。

Bdag gi bsam paḥi stobs dañ ni// de bshin gśeḡs paḥi byin stobs dañ// chos kyi dbyiḡs kyi stobs rnam kyis// don nam gañ dag bsam pa kun// de dag thams cad ci rigs par// thogs pa med par ḥbyuḡ gyur cig//<sup>(17)</sup>

(我(衆生)之所求誠実力，如来加持悲願力；法界同体大悲力，所求一

切諸利益，種々一切諸善業，無碍無障自然成。)

私（衆生）の求める誓願力は，如来の悲願力による加持と，法界と同体の大悲力によって，求める諸々の一切の利益と，種々の一切の諸々の善業とが，無碍無障に自然に成就しますように。

と記述している。

『華嚴經』も，「信為道元功德母，增長一切諸善法。」<sup>(18)</sup>

信は道の元にして功德の母であり，一切の諸々の善法を增長す。

と述べている。

従って，仏教徒は，あるいは一切衆生は，幼児が自分の母親を信じ依存するように，上師，仏，法，僧を信じ依存すれば，仏・菩薩は，大慈・大悲をもって衆生に幸せを与えるはずである。仏・菩薩の大慈・大悲の力は無限であるから，仏縁がある衆生の一切の祈願する善業を達成することができるだけでなく，成仏するまで助けてくれるものと考えられている。

『釈迦牟尼仏賛』 (*skabs gsum pha bshugs so*) には，

de bshin gśegs pha khyed sku ci ḥdra dañ// ḥkhor dañ sku tshihi tshad dañ shin kham dañ// khyed kyi mtshan mchog bzañ bo ci ḥdra ba// de ḥdra kho nar bdag sogs ḥgyur bar śog/ khyed la bstod ciñ gsol ba btab paḥi mthus// bdag sogs gañ du gnas paḥi sa phyogs der// nad dañ dbul phongs ḥthab trsod shi ba dañ// chos dañ bkra śis ḥphel bar mdsad dug sol//<sup>(19)</sup>

(如来体微妙云何，及於眷属共寿量；境界及於号云何，願我等皆亦復然。賛祝釈尊微善力，我等随方所在処；病魔貧争尽消除，法祥增長祈皆賜。) 如来の聖なる体のように，私たち衆生の寿量も，如来のようになることを願い奉る。釈尊を称賛する善力をもって，私たちは所在する一切の場所，一切の病魔と貧乏と争いは消除され，法による吉祥を增長し賜うことを祈り奉る。

と記している。

モンゴル仏教の僧侶の考えでは，一人一人が世の中に生まれて来た使命が違うのであり，社会に対する責任が違うのである。しかし，仏教徒としての

人々への救済と利益する目的は、同じであるはずと考える。モンゴル仏教の活仏や高僧には、モンゴル仏教の僧侶と民衆に「幹一行、愛一行、專一行」が要求される。つまり、仏教の僧侶は、仏弟子として釈尊の教えを正しく民衆に伝える責務がある。日々の「朝課」に心を込めて読誦しなければならないのは、この一点にある。僧侶の責務は、菩提道による人生の修行にある。だから、僧侶は、釈尊の教えにある「慈悲喜捨」の菩薩行をもって社会に貢献し、檀家たちに報恩感謝し、檀家の善き願いを満足させなければならない。僧侶の役割を活かして、一般仏教徒と共に力を合わせて、世界平和と解脱のために尽力するように実践し貢献しなければならないと考えられている。

## 注

- (1) 胡雪峰 嘉木揚凱朝編訳『藏漢蒙佛教日頌』(Hu Xue Feng, *Tübed kitadmonggol qabsurgagsan qandon nom* 中国民族出版社, 2000年) 20頁。
- (2) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 290頁。
- (3) 李舞陽主編「藏伝仏教礼讃祈願文 *rGyun ḥdon bstod smon phyogs bsgrigs*」(『藏伝仏教文化叢書』, 中国民族音像出版社, 1997年) 2頁。
- (4) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 15~16頁。
- (5) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 301~307頁。
- (6) 拙論『モンゴル仏教の研究』(法藏館, 2004年) 1~2頁。
- (7) 詳細は、拙論「チベットとモンゴル仏教における活仏の由来」(『同朋大学佛教文化研究所紀要』第21号, 2001年) 19~49頁参照。
- (8) 拙論「モンゴルにおける浄土思想」(『パーリ学仏教文化学』第17号, 2003年) 21~18頁。
- (9) 前田恵學編著『現代スリランカの上座仏教』(山喜房佛書林, 1986年) 1~9頁参照。
- (10) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 117~118頁。
- (11) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 3~4頁。
- (12) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 6~7頁。
- (13) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 75頁。
- (14) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 80~83頁。
- (15) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 38~42頁。

- (16) 化普樂羅侯囉長老『佛陀的啓示』(新加坡佛教坐禪中心, 2002年) 85頁。
- (17) 『供養護法文』(雍和宮所藏) 15頁。
- (18) 『賢首菩薩品』(大正9・433c)。
- (19) 前掲『藏漢蒙佛教日頌』(中国民族出版社, 2000年) 115~117頁。